CONTENTS

文化庁月報 1993 5 No.296

特集●「歴史の道」の保存と活用

皇太子さまと熊野古道 4

■座談会 歩き・み・ふれる歴史の道
丸山雍成／上原　茂／山本新平／小林和子／服部英雄（司会） 5

甦れ人間――歴史の道の保存と活用―― 松野　功 15

「歴史の道」飫肥街道 時元省二 18

都道府県のページ

一度は行きたい博物館・美術館②
碧祥寺博物館（岩手県） 21

法人紹介～文化に息吹を～

日本語学習者の多様化にこたえて
㈳国際日本語普及協会 26

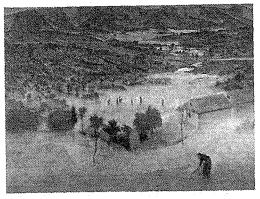
ACA(Agency for Cultural Affairs) NEWS

海外展報告……32
内田文化庁長官WIPO事務局長と会談 ……33
平成４年度日本芸術院賞受賞者決まる……34
平成４年度芸術選奨決まる……36
平成４年度芸術作品賞決まる……38
平成４年度文化庁優秀映画作品賞決まる……39
平成４年度舞台芸術創作奨励賞決まる……40
平成５年度中学校芸術鑑賞教室公演
日程決まる……41
平成５年度移動芸術祭・同巡回公演春季公演
日程決まる……42

●ちょっと一息／市川亀治郎……20
●施策Ｑ＆Ａ……30
●著作権法利用講座②……32
●文化財保護法発掘講座②……33
●芸術文化振興基金ニュース……46
●今月の国立劇場……47
●編集後記……48

イベント案内

第28回人間国宝新作展……43
第30回日本伝統工芸染織展
第23回伝統工芸日本金工展……44
第９回伝統工芸第七部会展



「農耕の民」（平成３年度文化庁買上作品）
福王寺一彦／作

ふくおうじ・かずひこ／昭和30年東京都生まれ。昭和49年福王寺法林に師事。昭和53年院展初入選。昭和55年院友推挙。昭和60年、61年、平成２年、３年院展奨励賞。文化庁現代美術選抜展出品。昭和62年第９回山種美術館賞展出品、62、63年院展日本美術院賞・大観賞・特待推挙。昭和61年、平成２年、３年春の院展奨励賞。平成４年同人推挙。現在：日本美術院同人。

上原　茂　長野県和田村教育委員会総務係長（右）
山本新平　和歌山県教育庁文化財課主任（左）

座談会

歩き・み・ふれる歴史の道

服部英雄
文化庁記念物課文化財調査官

丸山雍成　九州大学教授(右)
小林和子　みろく山の会会員(左)

歴史の道事業のスタート

服部　昭和五十三年度に歴史の道の調査と整備事業を開始しまして、ことしで十六年目になります。この間、歴史の道の調査は、全国で三十三の都府県で終了あるいは進行中、また、整備については、八県二十一市町村が取り組んでいます。

こうしたことを受けて、文化庁では歴史の道の活用事業を計画しました。本年度の五月八日、学校が休みになります第二土曜日を中心に、文化庁が主唱して「歩き・み・ふれる歴史の道」という事業を考えています。この前後を奨励期間として、全国でなるべくたくさんの方に歴史の道を歩いていただこうという企画です。

さて、きょうお集まりいただきましたメンバーですが、まず九州大学の丸山雍成先生です。先生は近世交通史がご専門で、ちょうど歴史の道事業が始まりました昭和五十三年に文化財保護審議会の第三専門調査会の委員として入られましたので、これらの事業を内からも外からも見ていただいています。

小林和子さんは、みろく山の会という、社会人の山の会に属しておられまして、この会は中高年の方々が山を本当に楽しむための会

だとお聞きしています。会では歴史の道を大変よく利用していただいていますので、利用者として参加していただきました。

上原茂さんは長野県和田村の教育委員会の係長さんで、昭和五十三年以来、歴史の道の「中山道」の整備に取り組んでこられた方です。

山本新平さんは和歌山県教育庁文化財課の主任さんで、同じくこの事業が始まったときから調査と整備事業に取り組んでこられた方です。

きょうは歴史の道をつくる側と利用する側の方、またそれを外から見ていただいている方という取り合わせになっているかと思います。

最初に、この十六年を振り返って、始めたころの苦労話などを上原さんと山本さんにお伺いしたいと思います。

上原　中山道は、和田村の谷間の川沿いを南北に十七㎞にわたり走っています。そのうち和田峠部分について、本事業が開始された昭和五十三年度から整備に着手しました。予備調査の時点では公図、あるいはお年寄りの記憶を頼りに雑草木の茂みの中、埋没した道形の確認調査を毎日行ったこと、そして、調査後半には峠の頂上付近を通過するビーナスラインがすでに古道を数カ所寸断しており、完全な姿で道の復元ができないとわかって、複雑な感情を抱いたことを思い出しています。

整備については第一次事業として、昭和五十三年から五十七年まで、五・三㎞にわたる峠道の修復と、峠中腹に残る建物で旅人を接待した「永代人馬施行所」の解体復元、和田宿内の旅籠「河内屋」の修復を行いました。

昭和六十一年度から平成二年度までの第二次事業では、同じく宿内に残る本陣「長井家」の居室棟の解体復元を行いました。

山本　和歌山県では、歴史の道の中心は南の熊野三山と北の高野山を参詣する道になります。両者とも古代からの宗教的メッカのようなところで、それぞれ参拝のためのルートがたくさんあります。

調査は、整備事業のスタートに先行して五十二年にはじまりました。「熊野古道」とか「熊野道」という形でスタートしたんですが、最初は田辺から三山をめぐる「中辺路」ルートを考えていました。といいますのは、四十五年に、今の国道三一一号線が県道から国道に昇格したのですが、中辺路ルートに重なってくるということで、すでに県事業として近辺の文化財も含めた調査を実施していたからです。また、四十六年から三カ年で県の補助事業として地元の中辺路町、本宮町が説明板とか案内板の設置を進めていました。

ところが、調査は単年度で一街道を完了しなければならず大変でした。

熊野道のうち京都を出発して、淀川を下り、大阪の天満で船をおりて、陸路でずっと海岸沿いを田辺まで行く道を便宜上、「紀伊路」と呼びますが、その他田辺から東方の山中にわけ入り三山をめぐるルートを「中辺路」、田辺から紀伊半島をグルッと串本を通り海岸沿いを一周するルートを「大辺路」、本宮から吉野、奈良のほうへ抜ける道を「小辺路」と呼びます。この四つのルートを最初から単年度で実施せざるを得ず、県内だけでも約四百㎞を超えるわけで、現状を把握するのが精一杯という状況でした。

調査段階で、時代的な押さえ方が問題になりました。近露から小広峠までの間は『中右記』によると、谷底の仲野川を何度も渡りながら詣でるという記載がありますが、熊野詣の重要な要素である王子社も中世以降の変化が大きく、明治の神社合祀もあり、その地点が確認できないものもありました。

整備は、中辺路ルートについて昭和五十三年から平成元年まで、中辺路町、本宮町、熊野川町、那智勝浦町、田辺市の約五十八㎞ほどを整備しました。ただ、熊野速玉大社のある新宮市に残る「高野坂」という約三㎞ほどの石畳道や、それぞれ隣接する町のごく一部分が未整備であったり、さらに北の「紀伊路」の整備が問題として残っています。

整備済みの道も全部一つながりで続いた道ではなくて、国道・県道・市町村道や林道が何度か交差したり、重複しています。保存の良いところは山越えの部分ですから、非常に不便で、ヘリコプターで資材を搬入したり、ほとんど人力でやったり、安全確保のため、もともと石垣等のないところまで積まざるを得ないというところもありました。

大塔山系の山深い地域で、年間雨量は五、六千ミリ、台風も非常に多く、整備してもすぐに路面が荒れる箇所もありました。

服部　相手は自然の中にある地形ですから、がけ崩れなどの災害で道が動くこともある。熊野古道といえば、だれしも平安時代からの道だと思いますが、実際には明治時代に熊野古道といっていた道を整備した部分もある。

熊野古道は徳川頼宣の命によって、江戸時代を通じて各王子を顕彰することが行われてきたわけです。明治になっても国道として扱われている。整備事業の前は、皆さんがよく使われていたんでしょうか。

山本　陸地測量部のルートは近世の熊野道とみて間違いないと思います。

山仕事で入られる方ぐらいで、一般の方の利用はほとんどなかったように聞いています。

服部　我々も古道を忠実に復元しようとやってはいますが、実際には災害等があると、その道を維持していくことが非常に困難になるので、迂回ルートをつけざるを得ないこともあります。我々がやってきた十六年間でもそうですから、江戸時代あるいはそれ以前から道が動いていたということは当然あるのではないかという気がします。

丸山先生、お話を伺えますか。

丸山　熊野古道は古代後期から中世にかけての宗教的な信仰の道、中山道は近世の政治的な道、奥の細道は芭蕉の文学的な紀行と深い関連のある道として、歴史の道事業の出発点にまず選ばれたという感じがします。その後、この事業は全国に拡大して、各県下の古道を網羅的に調査し、しかるべきところを保存するというもので、歴史の道に対する文化庁の本格的な姿勢がうかがわれます。

文化庁が推進する事業は、中世城館の調査・保存もそうですが、歴史学の研究を推進する上で大きく寄与しており、歴史の道の場合、交通や情報に限らず、歴史的研究に刺激を与え、牽引的な役割を果たしています。

その全国的な広がりとともに、史料の発掘も進み、歴史や文化に対しての考え方にも新しいものが付与されてきました。

例えば宿場は、点的側面をもっていますが、その周辺には助郷諸村が人馬役負担を通じて結合し、それ以外にも水利関係、商業その他、いろんな要素を包み込んで特定の生活共同圏が出来上がっています。そういうものを、今度は街道がベルト地帯のようにつないでいく、全国的に組織化する、という側面を持っているわけです。この歴史の道を調査することを通じて、研究の面でも非常に幅広く、深みを増してきたと思います。

そのことは、歴史的な環境、文化遺産がどんどん破壊されていく現代において、これを幅広く保護して、日本の歴史的な環境や景観を保持する役割を果たす点で、文化財保護行政の在り方として画期的ではないかと思います。

服部　最近亡くなられた戸田芳實先生は熊野古道を非常によく歩かれて、先生のライフワークの一つが歴史の道の事業と並行して行われたという記憶があります。戸田先生は、兵庫県の歴史の調査にも参画していただきました。

丸山　そうですね。戸田先生のお仕事は歴史の道研究として代表的なものです。

最近では、交通史研究の大会でも、街道筋の宿場や助郷に限らず、一里塚・石畳・並木などについて歴史の道調査に携わった方が発表したり、報告書とか論文に書いたりする傾向がでてきました。

歴史の道を歩いてみて

服部　今度は、歴史の道をいかに活用していくかという点に移りたいと思います。

小林さん、みろく山の会ではどういうようなことでこの歴史の道をお知りになり、歩かれるようになったんでしょうか。

小林　みろく山の会は、横浜にありまして四十歳以上の中高年を対象とした山の会です。三分の二近くは女性の会員で、元気な方はみなさん男性のリーダーについて冬のアルプスとか大変な山にもおいでになりますが、楽しく歩きたいという要望も多いのです。それと私自身が昔から歴史好きだったものですから、いつの日か全国の峠を歩いて見られたらなあという思いがありまして（笑）。

私が初めて熊野古道、「王子」という言葉に接したのは、女学校のときに『太平記』を習いまして、「由良の湊を見渡せば奥漕舟の梶をたへ……」というその最後のところに、「切目の王子に著給ふ」というのがあったんです。「王子」というのは何だろうと思いましたが、よくわかりませんでした。

昭和三十年代の終わりごろにたまたま主人と二人で和歌山県を旅行しましたときに、本宮大社に詣でましたら、すぐ近くに祓戸王子という標識があったものですから、行ってみました。私が何十年来思っていて初めて目にした「王子」だったわけです。

会には創立当初からおりましたので、だんだんと山行を計画できる立場にもなりましたし、会でチャーターできるバスもありますので、そういうものを使えば多少離れていても峠を結んで歩くというプランを立てることが可能になりました。楽しいハイキングということで古道歩きの計画を始めたわけです。

最初は出羽三山で、全部歩いて回りました。熊野古道は一昨年の三月半ばに参りまして、滝尻王子から那智大社まで二日かけて歩きました。ただし、近露から岩神王子口はバスでつなぎ、二日目の発心門王子から湯峰王子も一部分はバスを使いましたが、一応滝尻から熊野那智大社までは歩きました。

その年の五月には、信州の峠をできるだけ歩いてみようということで、権兵衛峠から鳥居峠、そして与川道を歩きまして、馬籠峠から、最後は野麦峠を歩きました。それもバスを使いまして、間に二泊ほど宿をとりましてうまくつないで歩いてみたんです。

服部　事前に道の状況なんかは調査されるんでしょうか。

小林　ええ。もちろんそれはいたしますし、どこの自治体も非常にご親切です。特に熊野古道のときは、中辺路と本宮のどちらの観光協会も本当にご親切でした。

また、道がわからなくて、とんでもない時間に人様の庭先に入って道を聞くということがあるわけですが、熊野に関しても、与川道に関しても、地元の方は非常にご親切で、旅の人に対して協力的です。本当にありがたいことだと思います。

服部　出羽三山は奥の細道の一部ですから、本来は歴史の道で整備したいんですが、まだできておりません。お話しにあった熊野古道と与川道は文化庁の補助事業という形で整備したわけです。

小林　昨年、高野の町石道を歩いたんですが、あれもやはりそうでしょうか。

慈尊院から高野山上まで歩きましたが、ブルーの標識は見かけなかったんですが。

山本　町石道はこの事業がスタートする以前に史跡として指定されており、別の事業で整備しています。紀ノ川沿いの慈尊院から奥の院まで二十五㎞ほどあり、まだ整備中で案内板を統一するかどうか検討中です。

服部　標識は全国コンペで、入選したデザインを用いて統一的にやっています。

歴史の道を、歩かれた印象はいかがなものでしたか。

小林　本当に手つかずで残っている部分があるなと思ったのは、熊野よりむしろ与川道のほうでした。というのは、与川道は熊野に比べて標識の数が少なくて、ちょっと迷ったぐらい（笑）。熊野は標識が完備しておりまして安心して歩けましたが、お話のように石垣を積んだ部分とか、はっきりとわかる部分がございました。

近露に野長瀬一族の墓がありますが、そこでたまたま土地の歴史をよくご存じの方だと思うんですが、いろいろ話をしてくださいましてね。「昔のこの辺はよかった。こんな杉の木でなくて、自然林だったから本当によかった。そのころは有名じゃなかったけど、そのころに来ればよかったね」と言われましてね（笑）。欲張りですが、今でもいいけれども、昔はさぞよかったろうなという感じはしました。

山本　戦後、植林するのはほとんど杉、檜ばかりで、木材の低迷で枝打や間伐の手入れをしなくなった箇所もあります。こういう所では下草が生えないので、雨が降れば土が流れ、道がなくなるという悪循環がみられます。自然林であれば春になると多種の緑数、秋になれば紅葉、落葉といういろんな楽しみがあるんです。

今、中辺路町では、古道の周りの人工林を購入したり、借り上げて、雑木を植えつつあります。

服部　与川道は長野県の南木曽町にあるんですが、もともと木曽川べりの中山道の本道とは別の、荒天のときの迂回路という性格が強い道だったんです。ただ、和宮などの宮様が降嫁されるときには、安全な道として使われた。当時からちょっとわき道的な性格があったところです。南木曽町には有名な妻籠宿がありまして、妻籠周辺も歴史の道として整備をやっています。向こうはほっておいてもどんどん人が来る道ですが、与川道は知名度がないので歩く方は少ないんです。行った人は「なかなかよかった」という、玄人好みのする道なわけです。

今、利用のお話がいろいろ出ましたけれども、上原さんのほうから現在、中山道をどのような形で皆さんに利用していただいているかお話ししていただけますでしょうか。

上原　整備された中山道の活用については、青少年育成行事の、親子が触れ合う場として、歩いて楽しんでいただいております。また、公民館に関わる婦人学級等の各種団体が村の文化財研修の一環として現場で学習会を持っています。

　本陣の建物は、建坪が約百五十坪ありますので、文化活動の拠点として幅広く活用しています。先ごろピアノを寄贈していただきましたので、三十六畳敷きの板の間を舞台に、講演会、コーラスの練習・発表会の場として、また、コンサートを二回、皇女和宮特別展を十日間にわたり催すなどして多くの皆さんに楽しんでいただいています。

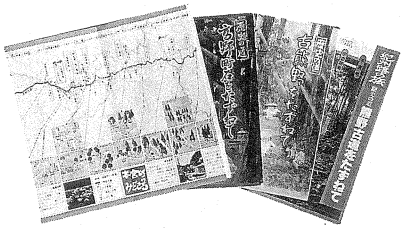
　今後は、建物前の庭を利用したイベントも考えています。

服部　修学旅行の人もずいぶん行かれるというお話ですが。

上原　昨年は、新潟県の中学二年生百二十五名が、修学旅行で「信濃路の文化財」研修にみえました。歴史の道「中山道」を教材化した追究活動と、地元の中学生との交流が二日間にわたりました。

　本陣の復元後は、隣の町や県内の小学校が毎年遠足で来るようになりました。

服部　年間どれぐらいの人が利用しておられますか。



上原　本陣は一万四千人ぐらいで、峠の中山道は、二ヶ所に置いてあります記帳簿を見ますと三千人ぐらいではないかと思います。

山本　私どもでは調査を始めた段階で、新聞にもよく取り上げていただきましたので、地元よりも他府県から「どこをどう歩けばいいか」という照会がたくさんありまして、パンフレットをできるだけつくって利用していただこうとしました。

　熊野は何分交通の便の悪いところですので、本格的に一つの峠を踏破される方も多いんですが、近くまで車で来られて、ちょこっと歩いて帰られる方のほうが圧倒的に多い状態です。春秋のシーズンには一日に何百人も来られるようですので、年間では万単位になるのではないかと思います。

　昨年五月に皇太子殿下が三泊四日で、中辺路ルートをご研究のために踏査されましたので、特に去年の秋はものすごく人が増えました。この機会を生かして地元の体制を整備し、再度大きなキャンペーンを考えていきたいと、地元とも調整をしています。

小林　私の身内で関西に住んでいる者が熊野古道を歩きたがりまして、いろいろ考えてやったんですが、最初の滝尻王子のあの山で音を上げてしまいましてね（笑）。後日「あそこを上がってしまえば後は楽だったのに」と言ってあげたのですが。ふだん歩きなれていない人たちには、滝尻から近露までの距離はちょっと長いんです。

　ですから、あの間に一ヵ所、公的な休憩所か、あるいは電話でタクシーを呼べるとか、そういうところがあるといいですね。私どもが歩きますときも、万一途中で落後者が出たときに、どの地点からタクシーが呼べるかということまで調査して歩き始めました。一般の方が歩くのだったら、やはりそういうことへの配慮は必要だろうと思います。

服部　歴史の道の整備を始めたときは、江戸

時代に近づこうということばかりで、車はなるべく排除しようと……。

　少しでも長く歩けるところを選びまして、車を置いていってまた戻るということは全く考えていなかったので、それは新しい利用の仕方だということになりますね。

山本　一日かけて、峠の雰囲気をゆっくり味わいたいというニーズと、駆け足で入り口だけでもいいから見たいというニーズがありますので、両者に対応できる体制が必要です。いざというときに連絡の取れる方法とか、近道ができるとか、たくさん利用していただこうということになると、そういうフォローの必要性をつくづく感じます。

服部　非常の場合の連絡措置は必要ですね。きょうは宿題を一ついただきました（笑）。

山本　実は整備の段階で、本格的な休憩施設や公衆電話の設置を考えたんですが、電柱が必要ですし、最低の使用度数を確保しなければなりませんし……。

小林　私どもの会員で関西にお住まいの方がいるんですが、熊野古道を歩こうとか、関西の歴史の道を歩こうという、旅行社とか新聞社主催の旅のお知らせがけっこうあるそうです。

　PRを一番人口の多い首都圏で盛大におやりになるといいんじゃないかという感じがあるんですが、どんなものでしょうか。

服部　文化庁はPRが下手だということで有名でして（笑）、そういう反省に立って今度「歩き・み・ふれる歴史の道」ということを企画しているわけです。

歴史の道を管理する立場

服部　次に管理のお話を伺いたいと思います。

上原　毎年村の一般会計予算に、維持管理費として草刈り賃金約十日分、その他建物管理賃金を計上しています。本陣、河内屋等資料館の管理は、十二人の方に交代でしていただいています。

　整備した中山道については、和田中学校の生徒百四十名が毎年七月上旬の一日、授業の一環として、中山道にまつわる歴史を体験から学ぶ一方、道の草刈り、ごみ拾い等の清掃作業をしています。これらの作業は、歴史の道保存整備事業を始めた昭和五十三年度から今日まで、十五年間続けています。

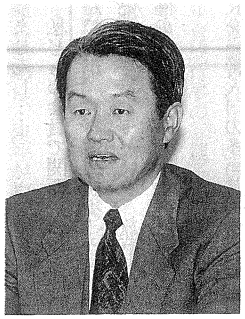
　また、昨年からは、信州大学の人文学部の学生さんが五月下旬から七月中旬の毎週土曜、日曜の二日間、宿内の旅籠「河内屋」で体験生活をしながら、復元した建物の小修理、中山道の丸太階段、側溝等の整備をボランティア作業として実施してくれています。村としてもたいへんありがたいことです。

　それから、村内の男女倉に東京都目黒区の保養施設がありまして、交流をしている関係から、毎年秋に恒例となりましたが「歴史の道を歩く会」が実施されます。会に参加される皆さんは約八十人ですが、施設で一泊し、翌日和田峠頂上より道を歩きながらごみ拾いをしてくださいます。

　管理上で一番困りますのは、標識と説明板等へのいたずらです。平均すると毎年一、二件あり、特に道標等の盗難、方向転換にはたいへん迷惑しています（笑）。

　もう一点、整備した中山道はほとんどが山の中を走っています。造林計画に基づく間伐作業等には大型機械が導入され、切り倒された材が搬出されますが、どうしても整備された道を横断せざるを得ないのが実態です。側溝等が現状に復帰し、落ちついた道に戻るには時間がかかり、維持管理していく上で大きな問題です。

山本　私どもが一番心配しますのは、周りの環境が変わってしまうことです。というのは、整備した段階では、七、八十年の大きな杉、檜があり、適当に下草が生え、路肩の防護にもなっていた。ところが何年ぶりかで歩きま



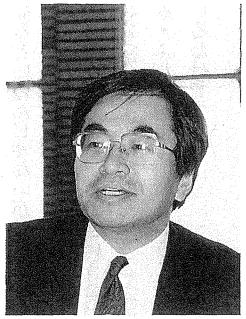
すと、まわりが皆伐され、植林はしていますが、路面の荒れが始まっているという箇所もありました。

今のところ指定の範囲は、整備した道そのものの幅ですので、線をもうちょっと両側へ広げ、残っている自然林があれば、そこも指定範囲に入れるとか、人工林でどうしようもないところは、積極的に人工林を伐採して、自然林に近いように植栽によって復元をする必要がある。

歩いていただければ実感するのですが、岩がゴツゴツするよりも、草を踏みしめながら、これからですと緑のトンネルを、秋になれば紅葉のトンネルや落ち葉をカサカサ踏みしめて歩ければ、これ以上の環境はないと思います。

丸山　先ほど熊野古道復元について、江戸時代の終わりごろの状況を基礎としたとおっしゃいましたが、古代から中世を経て近世まで相当年代の幅がありますから、当然道筋は変わりますね。熊野古道を指定された時、恐らく地元で「いや、昔はこの道じゃなかったはず」との意見も出たと思いますが、そういうことが研究を一層深める契機となりましょう。歴史の道の調査・保存の過程で、修正すべき箇所は修正し、より正しい方向に持っていく方策が講じられたと思います。

もう一つ、民間団体で、例えば東海道ネットワークの会というのがありますが、これは相当多くの会員を擁しています。東海道を大阪または京都から江戸までつないで、それぞれ研究会・文化講演会・歩く会などをし、松並木の補植などもボランティアみたいな形でやっておられる。そういう組織は大小各地にあって、この会は一番大きいほうだと思います。東海道の場合、各県単位かそれ以下の組織が、会と連携して毎月活動し、街道筋の文化向上などの面にも種々役立っているようです。



服部　江戸時代には、道の管理は幕府や藩の直営だったんですか。

丸山　そうです。五街道は幕府の道中奉行が、主要な脇街道などは藩などが管理しますが、後者は幕府の勘定奉行にうかがうべき事項がありました。道筋の付替えなどがそうです。

江戸幕府は慶長九年に一里塚をつくらせたといわれています。五街道の場合、ある程度徹底はしますが、脇街道はそうでもありません。しかし、幕府は藩に通達し、藩自身もそれを遵守しようと努めます。並木の保護は、幕府→藩→地元の住民という形で下達されますが、並木が生長すると並木敷に近い田畑は木陰になりますので、その部分には「木陰引」といって税金を免除するわけです（笑）。

それから、木が枯れたり折れたときは、沿道の者に補植させて、それには一定の助成策を講ずるという形で、継承していくわけです。

これからの歴史の道

服部　最後に今後の課題ということで、山本さんいかがですか。

山本　歴史の道の目的は点と点をつなぎ、その線をひろげて歴史的な空間と周りの自然環境をも含めて〝実体験〟できるようにすることだと思うんです。文化財は残すだけでなく、活用することが必要で、それぞれのニーズにそって地元も対応していく必要があるのではなかろうかと思います。

熊野詣の場合ですと、「御師」「先達」「比丘尼」という体制が確立して、今でいう旅行会社のようにPRするところと、添乗員に該当する者、参詣者を受け入れる宿や心のやすらぎを得られる場というように、千年近く前からそういう組織があったからこそ、全国から熊野三山にまで人が来た。今後もう少し系統立てて、熊野にかかわらずすべて歴史の道を利用できる基盤づくりを図っていけば、もっと親しまれたいいものができるのではないかと考えます。

丸山　歴史の道の調査では、有形無形の文化財、史跡名勝天然記念物など、そういうものも含め道の両側各一キロのベルト地帯を対象としますね。しかし、報告書に記しただけでは一般には普及しません。やはり地方自治体などがもう一工夫して、多くの人が関心を抱くように努める、また、保存整備策を講じながらも、併せて交通・宿泊施設などを充実させる必要があります。私も熊野古道を回ったとき、全ルートを完全に踏破したわけではなく、あるところは歩き、あるところは車を使いました。その際、途中に旅館などがあれば非常に助かるわけで、これらの施設を整備し、宣伝していただくと非常にありがたいですね。

私は学生には文学作品、例えば島崎藤村の『夜明け前』の主舞台、中山道の馬籠・妻籠その他といった具合に、休みのときぜひ見学しておくように言うんです。文学作品のような親しみやすいところから、歴史的関心を深めていくのも一方法です。定年を迎えた人だと時間的余裕もあり、講師がバスで旧街道に案内するといった講座も各地にあります。いろんなものを総動員して宣伝普及すれば、歴史の道の愛好者・利用者ももっと多くなるのではないでしょうか。

上原　和田村の場合、住民が文化財に対してそれほど意識のなかったところから本事業を実施してまいりました。村内の点々としていた文化財が線として結ばれ、国の史跡に指定されたことで、多くの村民が過去の歴史や文化財に興味を示してきています。このことが、当初は取り壊す予定にしていた和田宿本陣「長井家」保存に結びついた結果ではないかと思います。

ただ、今後のことを考えると歴史の道保存整備事業にも大きな課題があります。特に史跡指定を受けた道と建物を保存していくための景観、修景上の問題解決は急務となっています。指定物件の周辺をどのようにして開発から保護するか。また、整備した道の両側にある立ち木の伐採です。特に立ち木については国有林の場合が多く、関係省庁との調整に

配慮していただければ幸いです。

建物は、それぞれ往時の姿に復元しましたが、維持管理面では当然補修が必要になる時期が来ます。地元では屋根、左官等の職人さんが、数年後には後継者がいなくなるという現実があります。今から計画的な補修を心がけていかなければならないと思います。

それから、道の連続性の問題です。町村境で歴史の道が途絶えてしまう実態が、道を歩く皆さんからご批判をいただきます。今後は少なくとも道を歩く多くの皆さんのためにも、利便性を考えた標識の設置が必要ではないかと痛感しています。

服部　歴史の道として整備した幅員に限られて、その周辺の環境が保存できていないということですね。

歴史の道の外側の緩衝地帯の問題については、今後はきちんとした制度にしていかなければいけないという課題は生じています。

それから、道が市町村ごとにブツブツと切れていると。例えば中山道は、長野県では今のところ和田村と南木曽町以外はやっていないわけですね。岐阜県に入りますと、中山道は南木曽からつながる中津川、恵那、瑞浪、御嵩へ入りますね。あのあたりは地元市町村も積極的ですから道をつなげるようにしていきたいと思っています。

丸山　この問題は当初から予想されたことですね。実は私も十周年のとき、服部さんと『日本歴史』にちょっと書いたことがありますが、関係省庁や地方自治体、地権者などと文化庁との折衝は大変だろう、と。今後も引き続き出てくる問題だと思います。

ただ、文化庁が歴史の道整備事業を相当な困難覚悟でやり始められ、その通りになったとして、これは歴史的環境や自然景観を併せて保全するという、文化財保護思想の極点に位置する事業ですから、この高邁な精神を具現するため全力をあげていただきたいし、また、その辺は十分に配慮しながらうまくやっておられると思います。現在、ヨーロッパ諸国でも、各省庁が連絡しあって古街道を中心とした歴史的環境や自然景観を守るための総合行政が推進され、官民一致の協力態勢もみられます。文化庁は、世界的普遍性を有する事業を独自の形で打ち出し、日本も立ちおくれてはいけないとの立場を堅持しているものと思います。

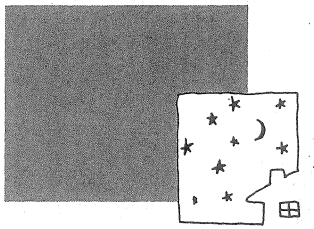
服部　歴史の道の事業というのは、史跡、歴史に触れるということからスタートしているわけでして、古道の周辺にはいろいろな遺跡があるわけです。実際、点々としている遺跡を有機的に理解してもらうためには、そこにある古道を歩くのが一番ではなかろうかということが出発にありました。道は人々の交流の場であり、また物資の交流の場であります。人々というのもいろんな人がいたわけで、熊野古道の場合でいえば、藤原定家の『熊野御幸記』などを読めば、高貴な人は輿に乗ってあそこを旅したわけです。一方、貧しい人であったり、あるいは不治の病に冒された人たちも流浪の旅をしていたわけです。そういう底辺の人たちに救済の手を伸べたのは一遍上人ですが、調べてみると、意外に古道沿いに一遍に関する遺跡があります。道を歩くことによって、当時歩いた人たちの心の世界を復元できる、そういった人々の追体験ができる。そうしたことを目指して、歴史の道の事業を始めたわけです。

今度の「歩き・み・ふれる歴史の道」事業を、文化庁が呼びかける一つのねらいはそこにある。歴史とのふれあいです。いろいろ試行錯誤もあると思いますが、ぜひともこれは成功させたいと思っていますのでよろしくお願いします。

きょうはお忙しいところをありがとうございました。

5月文化庁行事予定

11日・平成５年度都道府県宗教法人事務主管課長会議（国立教育会館）
14日・文化財保護審議会（文化庁）
16日・平成５年度全国都道府県・指定都市芸術文化行政事務担当者会議（都道府県会館）
18日・春の叙勲勲章等伝達式（国立劇場）
25日・春の褒章伝達式（如水会館）
31日・日本芸術院賞授賞式（日本芸術院会館）
・日本芸術院新会員・受賞者宮中お茶会（宮中）
中旬・重要無形民俗文化財指定証書交付式（文化庁）



文化庁月報　５月号（通巻296号）
平成５年５月25日印刷・発行

編　集―文化庁
〒100 東京都千代田区霞が関３－２－２
発　行―株式会社ぎょうせい
本　社　〒104 東京都中央区銀座7-4-12
電話03(3571)2126（代表）
営業所　〒162 東京都新宿区西五軒町4-2
電話03(3268)2141
振替口座　東京９－161番
印刷所―㈱行政学会印刷所

定価500円（本体485円）送料51円
年間購読料6000円
本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込み下さい。

広告の問い合せ・申し込み先
㈱ぎょうせい営業第一課宣伝係
電話03(3269)4145（ダイヤルイン）

©1993 Printed in Japan
ISSN 0916－9849

編集後記

今の我々が「旅行」と聞くと修学旅行、ハネムーン、フルムーンといった楽しいものをイメージしますが、明治以前の旅行と言えば、ほとんどの場合徒歩に頼るしかありませんでした。時間がかかるのはもちろんですが、橋のない川を渡ったり追剝にあったりと現在に較べればはるかに辛く苦しいものであったことでしょう。古来より紀行文が日本文学の中で重要な位置を占めるのも、旅が人間に言わば試練を与えてきたためかも知れません。

東京・大阪間が二時間半で結ばれる現在、昔の人々が歩いた道が一部にせよまだ残っているというのはちょっと信じられないことですが、そんな道を自分の足で歩くということは、歴史にじかに触れる数少ない方法の一つと言えます。しかも道の周囲の環境が当時のままに保たれていれば、定家や芭蕉の気持に少しでも近づけそうです。これも言ってみれば今はやりのヴァーチャル・リアリティというやつでしょうか。（K）